

# 中国 路地裏経済漫歩

「百万家庭学礼儀」(1年に20万家庭ずつ、5年かけて100万家庭にマナーを学ばせるキャンペーン)——公共マナーの普及を目指す上海市のキャンペーンのことで、「做個可愛的上海人(皆から可愛がられる上海人になろう)」を合言葉に、万博開催予定都市の面子をかけた作戦が繰り広げられています。

## マナー教育「ミッション」

最近、上海のある工場関係者の一行が商談のために来日しました。日本での滞在経験があり共産党員でもある団長は、関西国際空港に降り立つなり、初めて日本にきた団員達に説明を始めました。

エスカレーターで整然と列を作り、急ぐ人のために通路を開けている日本人の姿を見つけては「これが日本人のマナーだ」と一言。停車中のバス車内を清掃したり、停車中のバス周辺のゴミまで拾ったりしている運転手の姿を指差して「これこそが公共道徳の精神だ」と力説したのです。

商談ミッションが一転して「マナー教育ミッション」に変わったような印象で

すが、彼は「上海は今、公共マナーの指導を強化すべき時に来ている。我々が学ぶべきマナーが日本の至る所にある」と真剣です。

## 「可愛い」上海人を目指して

「衣食足りて礼節を知る」という言葉にある通り、上海市民のあいだでも経済成長一本槍ではなく、マナーやモラルといった都市の品格が真剣に考えられる時代に入ってきたと言えます。

しかし実態はどうでしょうか。上海市婦女連合会が昨年九月に実施し、二万人近くが回答にした「上海市民マナー調査」によれば、市民が不快に感じるマナー違反行為には「路上での痰吐きやポイ捨て、公共の場での喫煙」「信号や横断歩道の無視」「公共交通での座席占領や他人押し」などが上位を占めたほか、「他人の家に勝手に入る」「バジヤマ・下着での公共の場出入りすること」も挙げられました。

上海の街中には「做個可愛的上海人(皆から可愛がられる上海人になろう)」というスローガンの看板が数年前から立ちはじめました。更に、「百万家庭学礼儀」とい

う、一年に二〇万家庭ずつ、五年かけて一〇〇万家庭にマナーを学ばせるキャン

## 「可愛い、市民になろう」が合言葉 都市の「品格」向上に挑む上海市



「可愛い、市民への道のりはまだ遠い？」

ペーンも始まりました。そこには、上海人の面子にかけて、二〇一〇年に万博までに世界の人々から笑われないようなレベルにまで、公共マナーを改善しなければならぬという逼迫した事情があります。

## 「礼儀の国」復活を事業目的に

東京で会社経営をする万里紅さんは上海出身、公共マナーの改善ニーズにビジネスチャンスを見出し、故郷上海でマナー教育の事業を立ち上げました。故郷を思う一念から万さんは、「礼儀の国」といわれた時代を取り戻すために、自身のライフワークをマナー事業に専念することに昇華させたのです。

万さんは、「マナーは形式ではなく、敬

天愛人」の精神であり、人に感謝する心、相手の気持ちを尊重する行為です。「マナーとは何か」という根本テーマから紐解いていかなければならない」と語っています。マナーとは狭くもあり、その普及には家庭や学校での教育と、その教育を無言のうちに実行・浸透させる社会環境の形成が最も重要です。その意味で、二〇〇〇万人に近い上海市民の意識改革を実行することは、気が遠くなるほどの時間と執念が必要な事業でもあります。

「果たして事業化できるのか」と不安を抱えて開業した万さんですが、「マナー」習得をスキルアップの道として位置づける企業やホテル、行政機関からのオファーも多くなりました。私たちの情熱と企業理念はいずれ全社会的に理解され、必ずビッグビジネスになりますよ」と自信満々です。

マナー教育事業は緒に就いたばかりですが、社会的意識の高まりを追い風に、情熱あるオビニオンリーダーたちの更なる活躍を心から期待したいと思っています。



村岡健司(むらおか・けんじ)氏  
日中経済貿易センター 上海事務所所長  
中国社会科学院 中日経済研究センター 特約研究員  
上海市外国投資促進中心 高級顧問  
「週刊エコノミスト」(毎日新聞社)「チャイナウォッチ」にて連載中